

校長室だより

犬のしつけに学ぶ…。

我が家では、かつて雑種の雌犬を飼っていました。

そもそも、当時福岡小の1年生だった娘（今は25歳、すでに嫁ぎました）がどうしても飼いたいと言ってきかないため、近所のお宅から我が家にやってきました。

「生命のある動くおもちゃ」だったのですが、ほどなく娘は飽きてしまい、結果的には手のかかる娘が1頭増えた形で、その後は私と家内が面倒を見てきました。

私の運動不足解消のため、散歩のパートナーだったのですが、私が散歩を怠ると私よりも先に犬が太り、私が頑張っている時期には、私よりも先に犬がやせてくるといった具合でした。

家内はとうの昔から私への関心はなく、以前は満面の笑みで出迎えてくれた子供たちは大きくなってしまい、私の帰宅を心から喜んで迎えてくれるのは、この犬だけになってしまっていました。そういう意味でも、私はこの犬に愛情を注ぎできました。

そんな愛犬が17年半の生涯を全うしてもうすぐ2年になります。

さて…。

この犬が小さかった頃の写真を見て、私なりにしっかりしつけようと訓練していた時代を思い出しました。

で、この「犬のしつけ」は、子供たちを指導するときの留意点にも通じるものがあるなあ…と気づきましたので、以下に記載します。犬と人間を一緒にするつもりは毛頭ありませんが、より繊細な人間を相手にする私たち教師や、子育て中の保護者の皆様が、子供と接するときの意識として参考になるのではないのでしょうか？

1 指示を出すときは目を見て

「おすわり!」、「待て!」など、指示を出すときには、まず目を合わせて、「これから指示を出すよ」ということをわからせ、集中させる。そして、端的に指示する。

2 ほめるときはタイミングよくオーバーなくらいに

指示・命令したことができたときには、大げさなくらいほめる。「ジャンプ!」と命令した際には、その足が地面につくかつかないかのタイミングで、首筋をいっぱい撫でて、「よし、よし、よくできた。いい子だ。」とオーバーなくらいにほめる。犬は嬉しくて嬉しくて、犬なりの「やる気」を出して、集中して次の指示を待つ。

反対に、命令したことができないときには、できなかったことだけを叱る。

「何度やってもできないんだから」とか、「この前もできなかった」、「馬鹿じゃないの?」と、人格（犬格）を全否定したり、他のことまで持ち出して叱ったりしない。

3 指示したことは必ずやらせる

「おすわり!」と命令したら必ずやらせる。できないときには、お尻を押すようにしておすわりの姿勢をとらせ、これがおすわりだと教える。もう一度命令してできたらほめてやる。それでもできないときに何度も「おすわり!、おすわり!、おすわりでしょ!」と何度も「くどく」連呼しないこと。連呼すると、そういうものだと思い、1回ではやらなくなる。また、やらないから仕方ないと人間があきらめると、犬は命令されたとしても、やらなくてもいいんだなと思うようになる。

いかがでしょう？子供たちと接するときと共通する部分がありませんか？

- ① 指示は端的に出す
- ② 信頼関係を築く
- ③ 意欲を持たせる

我々教師は、この3つを特に大切に指導していきたいと思っています。